

2. 火山の概況 (平成 15 年 10 月 23 日 ~ 平成 15 年 10 月 29 日)

浅間山では地震がやや多い状態が続いた。三宅島では噴煙活動が継続した。富士山ではごく弱い噴気が確認された。阿蘇山では中岳第一火口の浅部の熱的な活動が活発であった。桜島では噴煙活動が継続した。薩摩硫黄島、諏訪之瀬島では微動が発生した。(10月28日に開催された第96回火山噴火予知連絡会による全国の火山活動概況及び三宅島の火山活動に関する統一見解については、添付の参考資料を参照されたい。)

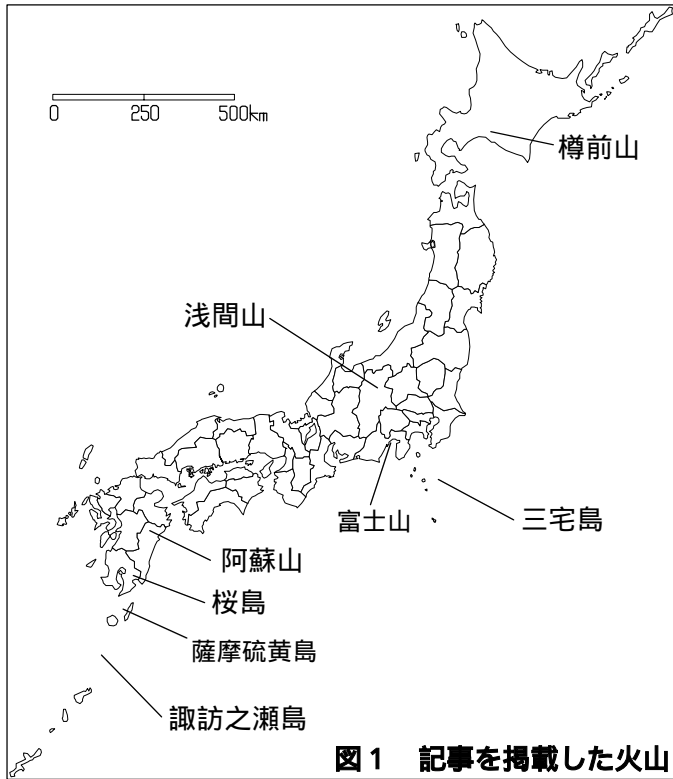


表1 最近1か月に記事を記載した火山

号	対象期間	樽前山	浅間山	富士山	伊豆大島	三宅島	阿蘇山	桜島	薩摩硫黄島	諏訪之瀬島
44	10/23-10/29									
43	10/16-10/22									
42	10/ 9-10/15									
41	10/ 2-10/ 8									
40	9/25-10/ 1									

注1 記号の意味

- ：噴火した火山
- ：観測データ等に变化があった火山
- ：前期間までに掲載した火山の、その後の状況等

注2 本文の火山名の後ろの[噴煙・噴気・地震・微動・空振・地殻変動・熱・火山ガス等]は、变化があった観測データ項目を示す。

樽前山 [熱]

今月5日以降時折観測されるようになっていたドーム南西噴気孔群 (B 噴気孔群) が夜間に高感度カメラで明るく見える現象は、19日以降観測されていない。

また、B 噴気孔群及びその他の火口からの噴煙活動、地震活動、地殻変動にも大きな変化はなかった。

浅間山 [地震・微動・熱]

6月末からやや多く観測されるようになった振幅の小さい地震は、今期間もやや多い状態が続いているが、1日あたり28~48回で前期間(1日あたり41~100回)より減少した。また、振幅の小さい微動は28日に1回観測された(前期間は2回)。

群馬県林務部が火口縁に設置している赤外カメラ及び高感度カメラでは、火口底で引き続き高温部が観測された。

富士山 [噴気]

東北東斜面の標高約 1,530mの林道脇で確認された地面の陥没とごく弱い噴気は、24日に実施した現地観測では、陥没が前回の観測時(9月30日)と比べさらに進んでおり、また周辺には新たに3か所の陥没と1か所の噴気孔が確認された。噴気の最高温度は約40℃で大きな変化はなかった(前回観測時は37℃)。

三宅島 [地震・噴煙]

24日03時27分頃、山頂付近を震源とする高周波地震により三宅島坪田で震度1を観測した。三宅島の島内を震源とする地震により震度1以上を観測したのは4月22日(最大震度2)以来である。振幅の小さいやや低周波の地震の回数は、1日あたり18~51回と落ち着いた状態で推移した。

噴煙の状況は、白色噴煙が最高で火口縁上1,000mまで上がるのが監視カメラで観測された。

GPSによる地殻変動観測では、今年6月頃から再び島の収縮傾向を示している。

阿蘇山 [熱・微動・地震]

中岳第一火口の浅部の熱的な活動が活発で、孤立型微動と地震がやや多い状態で推移した。

中岳第一火口内の状況は、27日に実施した現地観測によると、湯だまりの色は緑色で、茶色の浮遊物があり、中央部付近で噴湯現象が確認された。湯量は約6割で減少傾向が続いている。湯だまり表面の温度の最高は77と依然高い状態が続いている(前回の観測時(21日)は81)。南側火口壁の温度も290と前回の観測時(366)に比べ低下したものの、依然高い状態であった。

噴煙の状況は、少量の白色噴煙が連続的に噴出しており、噴煙高度の最高は火口縁上600mであった(前期間も少量・白色で最高高度は600m)。

孤立型微動は、今期間の発生回数が1,179回と多い状態が続いている(前期間は1,201回)。B型地震については、今期間の発生回数は181回で、前期間(351回)より減少した。A型地震の回数、地殻変動等、その他の観測データには特に変化はなかった。

桜島 [噴煙]

期間中、噴火はなかった(前期間は噴火1回(爆発))。噴煙の状況は、灰白色の噴煙が最高で火口縁上500mまで上がるのが観測された。鹿児島地方气象台(南岳の西南西約11km)で降灰は観測されなかった(前期間も降灰なし)。

薩摩硫黄島 [微動]

三島村役場硫黄島出張所によると、今期間降灰はなかった。

連続微動が26~27日及び29日に発生した。

諏訪之瀬島 [微動]

今期間は爆発は発生しなかった。

連続微動が26~29日にかけて発生した。

表2 火山情報発表状況

火山名	情報の種類及び号数	発表日時	概要
三宅島	火山観測情報第588号 (1日2回発表)	23日09:30	活動経過ほか(噴煙・地震・微動・空振・火山ガス・地殻変動の状況、上空からの観測結果、及び上空の風・火山ガスの移動予想)。 第600号は第96回火山噴火予知連絡会の統一見解。
	火山観測情報第601号	28日16:30	
	火山観測情報第600号	28日18:00	
	火山観測情報第601号	29日09:30	
	火山観測情報第602号	29日16:30	
阿蘇山	火山観測情報第23号	24日11:50	火山活動がやや活発(孤立型微動・地震が引き続き多い状態)。

< 2003年NO.43の訂正 >

阿蘇山 2行目 灰色の浮遊物 茶色の浮遊物

参考

平成 15 年 10 月 28 日、第 96 回火山噴火予知連絡会が開催され、同連絡会は、最近の全国の火山活動について委員及び関係機関からの報告をもとに取りまとめ、終了後、気象庁から以下のとおり発表しました。

平成 15 年 10 月 28 日
気 象 庁

第 96 回火山噴火予知連絡会 全国の火山活動について

2003 年 5 月以降、噴火した火山は、桜島、薩摩硫黄島、諏訪之瀬島の 3 火山でした。

三宅島では、依然として山頂火口から二酸化硫黄を含む火山ガスが放出されています。別紙のとおりに統一見解を発表しました。

阿蘇山では、熱的活動がやや活発な状態で推移しています。7 月 10 日には第一火口から土砂噴出が発生しました。

これらの火山では、今後の火山活動の推移に注意が必要です。

全国の火山活動状況は以下のとおりです。

1. 北海道地方

1) 雌阿寒岳

- ・ボンマチネシリ 96-1 火口は、2000 年以降噴煙活動がやや弱い状態となり、火口温度もやや低下しましたが、現在も 400 以上と高温状態が続いています。
- ・地震活動はやや活発な状態が続おり、一時的な地震の増減を繰り返しています。
- ・地殻変動観測ではやや伸びの傾向が見られています。
- ・以上のことから、現在も火山活動は引き続きやや活発な状態が続いていると考えられます。

2) 十勝岳

- ・微動は 2 月 8 日以降も 6 月までに 6 回発生しましたが、規模は次第に小さくなりました。顕著な地震増加は見られませんでした。
- ・62-2 火口は噴煙量や火口温度はやや低下する傾向が見られますが、噴煙活動は依然活発で火口温度も 300 以上と高温状態が続いています。
- ・以上のことから、現在も火山活動は引き続きやや活発な状態が続いていると考えられます。なお、火山活動による地殻変動は観測されませんでした。

3) 樽前山

- ・1996 年から地震活動が活発化し、その後 1999 年以降には熱活動も高まり、その状態は現在も続いています。
- ・2003 年 10 月には A 火口、B 噴気孔群および E 火口で噴煙活動がやや活発化しました。A 火口と B 噴気孔群では火口温度が上昇したほか、B 噴気孔群では 10 月 5 日以降夜間に高感度カメラで明るく見える現象が時々観測されています。このような現象は昨年 4 月にも認められており、硫黄燃焼が原因と考えられます。
- ・2003 年に山頂部でわずかな膨張傾向が見られました。
- ・以上のことから、樽前山では、A 火口および B 噴気孔群できわめて温度の高い状態が継続しており、引き続き注意が必要です。

4) 有珠山

- ・火山活動に特別な変化はなく、静穏に経過しました。

5) 北海道駒ヶ岳

- ・地殻変動は、1996年からの観測開始以降、継続して山体膨張の傾向を示しています。
- ・北海道駒ヶ岳は、1996年から2000年までの間に6回の小噴火が発生しており、噴火の数年前に小噴火を繰り返した1929年の大噴火や1942年の中噴火の前の状況と類似しています。
- ・なお、現在のところ、地震活動に特段の変化は見られていません。

2. 東北地方

1) 岩手山

- ・西岩手山で噴気活動が、東山腹下でやや深部低周波地震が続いているものの、浅部の地震活動や地殻変動は穏やかに経過しました。

2) 秋田駒ヶ岳

- ・6月に一時的に地震活動が活発化しましたが、その後は穏やかに経過しました。

3) 蔵王山

- ・6月下旬に、蔵王山付近を震源とする地震が一時的に増加しましたが、その後、火山活動に特別な変化はなく、静穏に経過しました。

4) 吾妻山

- ・地震活動が若干上向きですが、火山活動は穏やかに経過しました。

5) 安達太良山

- ・火山活動に特別な変化はなく、静穏に経過しました。沼ノ平火口内の地熱・噴気活動は衰退傾向が続いています。

6) 磐梯山

- ・火山活動に特別な変化はなく、静穏に経過しました。10月に入ってから南西方の深さ30km付近における深部低周波地震が多くなっています。

3. 関東・中部地方

1) 那須岳

- ・火山活動に特別な変化はなく、静穏に経過しました。

2) 草津白根山

- ・地震活動、地殻変動には変化はなく、熱活動、化学組成に若干の変化がありました。

3) 浅間山

- ・地震活動は2000年9月から活発な状態が継続しています。
- ・噴煙活動は一時低調となりましたが、10月に入ってやや活発になっています。
- ・二酸化硫黄の放出量は、4月より減少しましたが、多い状態が継続しています。
- ・火口底温度は低下したものの、やや高い状態が継続しています。
- ・以上のことから、火山活動はやや活発な状態が続いており、今後も火口周辺に降灰をもたらす程度の、小規模な噴火が発生する可能性があります。

4) 御嶽山

- ・火山活動に特別な変化はなく、静穏に経過しました。

5) 富士山

- ・火山活動に特別な変化はなく、静穏な状態が続いています。
- ・なお、9月に東北東山腹で地面の陥没とごく弱い噴気が確認されました。その後陥没や噴気の状態には若干の変化は見られますが、噴気に含まれるガス成分の同位体分析等を含む調査ではマグマ性の成分は検出されておらず、噴気温度にも顕著な変化は認められていません。また、地震活動・地殻変動等のデータに変化も見られないことから、噴火活動に直接つながる現象ではないと思われます。

6) 伊豆東部火山群

- ・6月に地殻変動を伴う小規模な地震活動があったものの、火山活動に特別な変化はなく、静穏な状態が続きました。

7) 伊豆大島

- ・地震活動は落ち着いた状態であり、地殻変動は長期的に見て、島全体が膨張する傾向が継続しています。

- 8) 三宅島
 - ・別紙のとおり統一見解を公表しました。
- 9) 八丈島
 - ・地震活動は静穏に経過しました。
 - ・火山活動に関連する可能性があると思われる若干の地殻変動が観測されており、今後の推移を見守る必要があります。
- 10) 硫黄島
 - ・火山活動に関連すると思われる地震活動、地殻変動等が継続しています。

4. 九州地方

- 1) 九重山
 - ・1995年10月の噴火で生成した火孔群の噴煙活動は弱まり、火山活動は静穏に経過しました。
- 2) 阿蘇山
 - ・7月10日に土砂噴出が発生しました。火山灰が降った領域は、中岳第一火口から東北東へ約14km、幅は1～2km程度でした。火山灰には、新鮮なガラス物質が含まれていました。
 - ・火口底の湯だまりは、湯量の減少傾向が続き、10月20日には見かけ上の面積は約6割に減少しました。また、湯だまりの表面温度は、9月下旬に80℃を超えるなど、熱的活動もやや活発化しています。
 - ・B型地震は、6月下旬から次第に増加し、9月からは多い状態が続いています。また、孤立型微動も9月から急激に増加し、多い状態が続いています。8月中旬には火山性連続微動も観測しました。
 - ・二酸化硫黄の放出量は、一日あたり約2,000トンと、やや多い状態となっています。
 - ・以上のことから、火山活動はやや活発化しており、今後の火山活動の推移に注意が必要です。
- 3) 雲仙岳
 - ・火山活動に特別の変化はなく、静穏に経過しました。
- 4) 霧島山
 - ・新燃岳、御鉢付近を震源とする地震は少なく、御鉢付近を震源とする微動も1回発生しただけで低調でした。
 - ・表面現象に変化はなく、地殻変動にも異常な変化は見られませんでした。
 - ・新燃岳の南側で消磁傾向が続いており、地下の温度上昇が熱変質が続いていることを示しています。
- 5) 桜島
 - ・9月は山頂からの噴火を繰り返し噴火活動が一時的にやや活発化しましたが、桜島としては2001年以降の比較的静穏な状態が続きました。
 - ・火山性地震、火山性微動は総じて少ない状態で経過しましたが、7月から9月にかけてA型地震がやや増加しました。
- 6) 薩摩硫黄島
 - ・降灰や有色噴煙が観測されるなど、火山活動は一時的にやや活発となりました。
 - ・7～8月は連続した火山性微動を観測しました。
 - ・GPS連続観測では、火山活動に起因する変化は認められませんでした。
- 7) 口永良部島
 - ・火山性地震は月に100回程度と多い状態が続き、振幅の小さな火山性微動や地熱異常を観測するなど、火山活動はやや活発な状態を維持しています。
- 8) 諏訪之瀬島
 - ・山頂からの噴火を繰り返しました。
 - ・6月10日に空振を伴った連続的噴火が発生、7月4日～5日には爆発的噴火が20回発生するなど、一時的にやや活発となりましたが、その他は、比較的静穏な状態が続きました。

5. 海底火山

- ・特異事象や変色海域が確認された海底火山はありませんでした。

平成15年10月28日
気 象 庁

三宅島の火山活動に関する火山噴火予知連絡会統一見解

三宅島の火山活動は、全体としてゆっくりと低下してきていますが、最近1年程度は低下の割合が緩慢になっています。火山ガスの放出は当面続くと考えられます。

三宅島の山頂火口からの噴煙高度および火山ガスの放出量は長期的には低下してきています。そのうち、二酸化硫黄についても、放出量はゆっくりと減少してきましたが、最近1年程度は、1日あたり3千～1万トン程度と概ね横ばい傾向となっています。火山ガスの組成に顕著な変化は依然認められず、マグマ中のガス成分濃度や脱ガスの条件などに大きな変化はないと考えられます。放熱率も最近1年程度顕著な変動は認められず、ほぼ同じ水準を維持しています。

火山灰の放出を伴う噴火は2002（平成14）年11月24日の小噴火以来観測されていません。

全磁力観測からは、山頂火口直下の温度は長期的には低下していることが推定されますが、その変化は緩慢です。火口内の表面温度も、長期的に低下しています。

連続的に発生している火山性微動の振幅は長期的には小さくなっています。山頂直下の火山性地震の活動は継続しています。

活動の開始以来観測されてきた三宅島の収縮を示す地殻変動は、2002（平成14）年8月頃から停止していましたが、2003（平成15）年6月頃から再び収縮傾向となっています。

以上のように、三宅島の火山活動は、全体としてゆっくりと低下してきていますが、最近1年程度は低下の割合が緩慢になっています。

三宅島では、今後も局所的に高い二酸化硫黄濃度が観測されることもありますので、風下に当たる地区では引き続き火山ガスに対する警戒が必要です。また、雨による泥流にも引き続き注意が必要です。